

特集

地域の高齢者と大学生による異世代間交流

一原 由美子・波止 千恵・梅崎 節子・山田 美幸

Intergenerational Exchanges between Local Elderly and University Students

Yumiko ICHIHARA, Chie NAMITOMI, Setsuko UMEZAKI, Miyuki YAMADA

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences
Junshin Gakuen University

【要旨】 家族形態の変化や社会生活の変化により、地域でのつながりや世代間の分離が問題視されている。子どもは、地域の中でさまざまな世代の人間と交流する機会が減少し、異世代間の交流を通じて得られる社会性や人間関係の構築など多様な視点から自己を見つめるといった機会が減少してきている。そこで、本稿では、本大学の看護学生と大学の所在する地域の高齢者との異世代間交流を行い、学生と高齢者との間で行われる相互扶助活動および大学と地域との連携活動について紹介する。

第1回 異世代交流プロジェクト（料理教室）

第2回 異世代交流プロジェクト（AED、スマートフォンの使い方）

第3回 異世代交流プロジェクト（地域の防災マップの作成）

キーワード： 異世代間交流 大学生 高齢者 地域貢献



一原 由美子

はじめに

近年、家族形態の変化や社会生活の変化により、核家族化や少子化に伴い、地域でのつながりや世代間の分離が問題視されている¹⁾。かつて高齢者は三世代世帯のなかで豊かな経験や知恵を子どもや孫の世代に教える役割を担っていたが、現代は高齢者の孤立、生きがいの喪失等が問題となっている²⁾。また、子どもは、地域の中でさまざまな世代の人間と交流する機会が減少し、異世代間の交流を通じて得られる社会性や人間関係の構築など多様な視点から自己を見つめるといった機会が減少してきている。本大学の看護学生も祖父母と同居している学生は少なく、

臨地実習などで高齢者との接し方に苦慮している。これらのことから、地域における世代間交流や世代間協働の大切さを見直すことが喫緊の課題である。

異世代間交流のプログラムはアメリカで1960年代から行われている。その背景としてアメリカでは、子どもは早い時期に親から独立し祖父母と暮らすことは一般的ではなかったことがあげられる。結果、高齢者と孫世代の距離がありすぎることが問題視され、2つの世代を結びつける取り組みが体系的に実施されるようになった³⁾。その後、1980年代から1990年代にかけてプログラムの焦点は、世代間の分離を埋めるものから地域共同体の問題に取り組むことに移行してきた。我が国においても少子化、高齢化、核家族化が進み1980年代には「世代間交流」という概念が使用され始めた⁴⁾。1993年になり、総務省老人対策室は、「世代間交流に関する調査研究」の結果を基に市町村の政策担当者向けに世代間交流マニュアルを作成している⁵⁾。

そこで、本稿では、純真学園大学の所在する福岡県福岡市南区筑紫丘1丁目に在住する地域のシニアクラブ第四筑寿会の高齢者と純真学園大学の看護学科の学生が異世代間交流をすることで、高齢者の健康づくりを支援し、地域のコミュニティ形成促進への寄与を目指し、両者の間で行われる相互扶助活動

および大学と地域との連携活動について紹介する。

1. 用語の定義

「異世代間交流」

異世代間交流とは、「子ども、青年、中・高年世代の者がお互いに自分達の持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と、自分の周りの人々や社会に役に立つような健全な地域づくりを実践する活動で、一人一人が活動の主役になることである¹⁾」と定義されている。

2. 異世代間交流のプログラム

1) 第1回 異世代交流プロジェクト（料理教室）

第1回目は、「これからの人生をより豊かに楽しく送るために」をテーマに、地域の高齢者と学生が協働して料理を作ることで、高齢者には包丁の使い方や材料の扱い方や切り方などを学生に伝授していただき、学生は高齢者とのコミュニケーションを図るスキルを体験する機会とした。

平成29年7月2日（日）に、地域の高齢者20名、看護学生21名、教員5名が参加し、前半は講義方式で「生活習慣予防」について、不足しがちな栄養素や運動や食習慣の重要性などを学習し、後半は、高齢者2～3名、看護学生2～3名が1グループとなり8グループに分かれて調理に挑んだ。

メニューは、純真短期大学食物栄養学科学科長、宅間真佐代先生にプロデュースしていただき、「中華風おこわ」「油淋鶏腿（もも肉のから揚げ）」「辣黄瓜（きゅうりの酢油づけ）」「杏仁豆腐」で調理を行った。

高齢者は慣れた手つきで鶏肉や野菜を切ったりしていたが、学生の中には包丁を使ったことが無い学生もいて、高齢者に包丁の持ち方や玉ねぎのみじん切りの仕方などをやさしく教えてもらいながら和気あいあいと調理を行っていた。調理が出来上がるとみんなで楽しく会話の弾む食事会をした。はじめは緊張していた学生も徐々にリラックスして高齢者に笑顔で話しかけることができ、高齢者はやさしく微笑み、お互いにコミュニケーションを図り楽しい時間を過ごすことができた。



高齢者と学生の協同作業写真



本日の料理



みんなで食事会



食についての勉強会

2) 第2回 異世代交流プロジェクト (AED, スマートフォンの使い方)

第2回目は、「AEDで命を救おう!」をテーマに、AED(自動体外式除細動器)を実際に使った救命講習を行った。高齢者は胸骨圧迫やAEDの使い方を体験し、必要に迫られた時のために訓練を行い、学生は、講義で学習した方法を高齢者に説明やアドバイスをを行った。また、地域の高齢者、特に女性からの強い要望で、スマートフォンの使い方を学生が高齢者に伝授するという事で相互の扶助活動を行う機会とした。

平成29年9月24日(日)に、地域の高齢者16名、看護学生17名、教員4名が参加し、前半は講義方式で「AEDの操作方法」について、DVDを見ながら救命処置の重要性などを学習し、後半は、5体のシミュレーション人形に学生が2名ずつ担当し、高齢者は交代しながら実際に倒れている人を発見したところからAEDを使い、救急蘇生をし、救急車が到着するまでを体験した。また、スマートフォンの使い方が不得手な高齢者に学生が丁寧に説明したり、アプリの入手方法などを伝授した。

高齢者の方は、初めて見るシミュレーション人形に驚いたり、少し、照れくさそうに「大丈夫ですか?」と声をかけていたが、学生が真剣にデモンストレーションを行い、胸骨圧迫やAEDの操作をしているのを見て、人を助けることの意義や真剣な救命行為に接することで、救命の大切さを学ばれたようである。

スマートフォンの操作では、基礎知識から操作方法、設定、応用テクニックまで、スマートフォンを使いこなすための情報を学生に真剣に聞いていた。また、Lineの使い方を学生に教えてもらい、「これからは孫とLineができるから楽しみ」と笑みを浮かべていた。



学生による救急蘇生のデモンストレーション



学生にスマートフォンの操作方法を教わる高齢者

3) 第3回 異世代交流プロジェクト (地域の防災マップの作成)

第3回目は、純真学園大学が所在する「福岡県福岡市南区筑紫丘1丁目地区の防災について考える」をテーマに、地域の高齢者と学生と一緒に地区を探索し、自分たちの住むまちの避難所や危険な場所について地域の高齢者が知っている情報を出してもらい、実際に確認しあいながら地図に記載し、地域の防災マップを完成させる機会とした。

平成29年11月11日(土)に、地域の高齢者22名、看護学生20名、教員4名が参加し、筑紫丘1丁目をA, B, C, Dの4区間に分け、高齢者5名と看護学生5名で1グループとし、各区間に分かれて探索する。実際の道路や建物、危険箇所などを確認したら大学に戻り、高齢者の意見を聞いたり、調べたことを各グループでまとめ、看護学生のリーダーが全体の大きな地図に記入していった。

地域での探索時には、学生が高齢者の歩くペースに合わせるなどの配慮をしたり、高齢者は学生に歩きながらいろいろな質問をしたり、どのグループも楽しそうに地域の探索をしていた。学生は、「この自動販売機は災害時にも使える。」とか、高齢者は、普段よく通っている場所に「こんな危険なところがあったんやね」と改めて注意が必要なことを認識していた。

学生と高齢者の共働で作成された地図をポスターにして地域のシニアクラブの方に配布した。



地域探索（危険個所の確認）



防災マップの作成

3. 異世代間交流がもたらす大学と地域との連携

今回の異世代交流プロジェクトは、大学が所在する地域の高齢者と本学の看護学生を対象に年3回の異世代間交流を開催した。異世代間交流プログラムは、参加した両者に、①良好な関係を築く、②社会適応能力を向上させる、③知識を深める、④機能的・学問的な能力を向上させる、⑤意思疎通を良くする、⑥自尊心を高くもつ、という影響を与えるとされている⁶⁾。家族形態の変化から三世同居世帯が減少している現在において、地域の高齢者と学生との異世代間交流プロジェクトは、互いの交流の良いきっかけとなった。この異世代交流プロジェクトに参加した学生は地域の高齢者との良好な関係を築くことができたと思う。3回とも参加した高齢者、学生は多数おり、通学時などで挨拶を交わすようになった。また、学生は、大学周辺の地域に関心を持ち、地域の清掃活動のボランティアにも参加している。地域の高齢者からは「大学生と交流したかった。」「学生さんと関わって元気をもらいたい。」「大学と協力して地域で学生さんを育てていきたい。」などの意見をもらった。

学生は、地域の高齢者からのアドバイスなどを受け、試行錯誤しながら、問題解決に近付いていく。そして、そのプロセスや成功体験を通じて、実践力を向上させる。

他方、学生たちのバイタリティーや感性、また新しいアイデアは、地域の高齢者に新しい力となって、問題解決とともに活性化に大きく貢献する。学生たちの健気で真摯な態度は、地域の高齢者たちへのエンパワーメントにもつながると思われる。

4. 今後の課題

大学の使命としては、地域に根差した教育、地域貢献を効果的に進める上で、学生と地域住民とのコーディネーターとしての機能の役割を果たさなければならない。これはとても重要であり、地域内外の組織との連携・協力のためのコーディネーターとしてのあり方も課題である。この地域貢献が大学としての従来の学術研究、人材育成に加え、第三の役割と位置づけられる⁷⁾。大学自らが従来よりも能動的に社会と関わり、社会の形成の一端を担う役割を果たすことを強く求められることを意味している。

今後大学は、異世代間交流を通して、学生や地域に寄り添い、実践力向上や地域の活性化へと導き、日頃から大学と地域が連携し、地域の高齢者が親しみの持てる場づくりとより良いまちづくりに貢献し、開かれた大学づくりを目指していかなければならない。

文献

- 1) 草野篤子. インタージェネレーションの必要性. 現代のエスプリ No.444, 5, 至文堂, 2004.
- 2) 内閣府 平成28年版高齢社会白書. 2018-1-30
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper>
- 3) 斎藤嘉孝. 子どもを伸ばす世代間交流 -子どもをあらゆる世代とすごさせよう-.

勉誠出版株式会社, 109, 2010

- 4) 草野篤子, 金田利子, 間野百子他編. 世代間交流理論構築のための序章とその歴史. 世代間交流効果 一人間発達と共生社会づくりの視点から一. 三学出版, 1-17, 2009
- 5) 健康長寿ネットわが国における世代間交流の活動. 2018-1-30
<http://www.tyojyu.or.jp/hp/page000003800/hpg000003767.htm>
- 6) 新田淳子, 緒方泰子. 世代間交流の効果に関するマイクロ調査. 「老人と子ども」統合ケア. 中央法規出版 80, 2000
- 7) 山田一隆. 新しい産学官一地域連携のあり方と大学・地域の役割: 京都・まいづる立命館地域創造機構の挑戦. 環日本海研究 (11), 149-151, 2005